

# 1999年度／平成11年度（平成11年4月～平成12年3月）



## 役員

部長：森 征一  
師範：岡野 功、安藤 勝英、朝飛 大  
監督：鎌木 文隆  
主将：助川 忠臣  
主務：高沼 宣浩  
副将：笠野 誠一  
4年生：大滝 誠  
体育会常任委員：助川 忠臣  
副務：高野 剛  
日吉高コーチ：西森 千尋  
志木高コーチ：赤澤 讓  
藤沢高コーチ：衛藤希世子  
女子高コーチ：村吉花奈子  
普通部コーチ：鈴木 龍海  
中等部コーチ：船越 健  
幼稚舎コーチ：大滝 誠

## 塾柔記

### 助川 忠臣

時が経つのは早いもので、私が引退してからもう二年が経とうとしています。ふと思えば、慶應義塾体育会柔道部で過ごした日々は昨日の出来事のように甦ってきます。合宿所での集団生活、四年に一度の海外遠征、伝統ある慶早戦での四年連続出場、夏の暑中稽古・冬の寒稽古、先生方・先輩方との会合など、ここでしか味わえない事を経験させて頂いたこの柔道部に大変感謝しています。楽しくもあり、辛くもあった数多くの記憶の中から、私が主将の時に一番印象深かった事について書かせて頂きたいと思います。

一番印象に残っている事は、私が四年生の春に日本武道館で行われた試合のことです。その試合は前年度に二部大会準優勝を果たしたこと、一部校との入れ替え戦の指名権を手にすることができ、その相手に早稲田大学を指名して、一部復帰を懸けたものです。オーダーによっては「絶対に勝てる」と部員全員が思う程でもあり、例年であれば、監督や四年生が決める我々のオーダーですが、この時は部員全員で勝利をものにするという意味を込めて、私案によりオーダーは部員全員で考えることにしました。いろいろ考慮した結果、早稲田大学が前半にポイントゲッターを置く事を予想し、それに対し我々は中盤に勝負を仕掛けるという今までとは稀なオーダーを作り上げました。早稲田大学のオーダーは我々が予想したオーダーと見事に的中し、あとは選手一人一人の役割を果たせば勝てると思っていました。しかし、日本武道館には魔物が住んでいるのか、我々には勝利の女神が微笑んでくれないのか、一人一人の勝利への執着心が足りなかつたのか、取るべき者が負け、分けるべき者が負け、結果として2-4で敗退てしまいました。

私はこのチャンスを部の勝利へと繋げられなかったことの悔やみと自分の試合結果の不甲斐なさに腹が立ったことを今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。この試合に引き続き、秋にも慶早戦、二部大会と結果を残せず、この部に恩返しをするどころか後輩達にも何も残せてやれなかっことで悔しく思います。二年弱経った今現在、たまに汗を流しに道場へ稽古をしに行き、汗を流している後輩達を眺めていると、彼らが大変輝いて見え、彼らに対して羨ましく思います。もし時間が許してくれるのならば、もう一度現役に戻って、慶應義塾の看板を背中に背負ってやり残したものを見たいという気持ちで一杯です。

最後に、平成10年10月25日に前年度主将の松宮先輩から引き継ぎを受けたその日から、慶應義塾最古の伝統を誇る柔道部主将として一年間過ごせたのも、熱心に御指導下さった諸先生方、温かく見守って頂いた信頼のおける諸先輩方をはじめ、懸命についてきててくれた個性豊かな後輩達、そして何よりも自分を支えてくれた、何事にも豪快な 笹野副将、問題に対して賢明な判断を下す高沼主務、気さくな人間性を持つ大滝幼稚舎コーチの三人の同輩にこの誌面をお借りして心から感謝の意を表します。

## 125周年に寄せて

高沼 宣浩

柔道部で過ごした日々は、今なお色褪せることなく鮮明なものです、印象深いのは主務として部の運営に携わったときのことです。その中でも、一番の晴れ舞台である早慶対抗柔道戦（以下早慶戦）を開催するに当たっては様々な思い出があります。

例年八月頃から早慶戦パンフレットを作成する為、原稿や広告の依頼、スペースの調整等を早稲田側の主務と打ち合わせを始めます。打ち合わせとは言え話し合いは最初の数十分で終わり、後はそれぞれの部の内情や、部員の色恋沙汰の話など極めて世俗的な話題に終始し、「今時の学生」らしさが垣間見える一時を過ごしていました。当時（といっても2年前ですが）打ち合わせは部費で食事をしながら行うのが通例で、0.1%程の罪悪感にかられながら、寿司屋や高級焼肉店で交友を深めていました。交友を深めすぎ、痛飲した挙句に醜態をさらすという恥ずかしい事件を起こしてしまったのは、若気の至りと言う他はありません。結局、より迫力ある顔写真と差し替えたりするせいか、期日に全てが揃うことではなく、出版元である「イナホ企画」様には多大なるご迷惑をおかけしました。部費の流用共々この場を借りて懺悔する次第であります。

最も苦心するのが「記念品」の選定であり、低予算で実用性があり見栄えのするものを探し出すのは一筋縄ではいかないものでした。悩んだ挙句に、ハンカチや湯飲み茶碗に決定されますが、早慶戦後には大量の不良在庫となって合宿所に保管される羽目になるのは毎年のことでした。その後ハンカチは雑巾に、湯飲み茶碗はビールのグラスへと用途を替え、いつしかきれいに無くなってしまうのですから不思議なものです。またOBの方々や日吉・三田周辺の飲食店へ広告協賛のお願いをしても、早慶戦パンフレットの広告効果が乏しいと見え、色よい返事を頂けない場合が多く、如何にパンフレットの体裁を整えるか頭を悩ませました。特に飲食店関係では、不景気の店や部員の足が遠ざかっている店からは広告を頂きにくく、広告元が減るたびに景気を肌で実感し、ミクロ経済の一端を垣間見る思いでした。ただ部員の中にも営業センスや日頃培った人脈を生かし、新規契約を結び大いに貢献する者もいたことを付け加えておきます。再び早慶戦が学生柔道の最高峰の試合として認められ、多くの方々がパンフレットの広告スペースを奪い合う位、隆盛を極められる日が来るのを待ち望んでやみません。

最後に、創部125周年という節目を迎えたことを一OBとして、心より嬉しく思うと同時に、體育会柔道部のますますの発展と部員諸君の活躍を祈念して筆をおかせていただきます。

# 試合記録

## ■第48回 東京学生柔道優勝大会 平成11年5月23日 日本武道館

1回戦	本塾	2	-	4	早稲田大学
	酒井 敬史	3年	不明	○	八木章裕
	助川 忠臣	4年	不明	○	西田清二
	赤澤 穂	3年	不明	○	廣田金次郎
	高沼 宣浩	4年	引分け		金辻真人
	西森 千景	2年	○		吉田真也
	笹野 誠一	4年	○		林健太郎
	高野 剛	3年	不明	○	塙谷耕吾
全日本学生出場決定戦	本塾	2	-	3	創価大学
	高野 剛	3年	引分け		吉岡健
	笹野 誠一	4年	引分け		長谷見貴史
	西森 千景	2年	○		菊地智見
	助川 忠臣	4年	○		高橋明夫
	赤澤 穂	3年	不明	○	野中圭太
	高沼 宣浩	4年	不明	○	富原学
	酒井 敬史	3年	不明	○	今泉紀明

## ■第48回 東京学生柔道優勝大会（女子） 平成11年5月23日 日本武道館

本塾	0	-	3	帝京大学
本塾	3	-	0	立教大学
本塾	2	-	0	桜美林大学
本塾	1	-	1	日本大学 代表戦負け、出場選手：村吉 衛藤 高野

## ■第18回 東京学生柔道体重別選手権大会 平成11年9月5日 日本武道館

-60kg級	1回戦	飯島 健介	1年	一本背負い	○	中村 明治大
-60kg級	1回戦	吉井 聰	2年	一本背負い	○	石井 日本体育大
-66kg級	1回戦	大滝 誠	4年	内股	○	塙谷 早稲田大
-66kg級	1回戦	鈴木 龍海	2年	上四方固め	○	村上 駒沢大
-66kg級	1回戦	柴垣 克樹	1年	体落し	○	高野 成蹊大
-66kg級	2回戦	柴垣 克樹	1年	払腰	○	久保 東洋大
-66kg級	1回戦	西森 千景	3年	送り足払い		高島 二松学舎大
-66kg級	2回戦	西森 千景	3年	内股すかし		中川 日本大
-66kg級	3回戦	西森 千景	3年	指導	○	藤田 国士館大 ベスト16
-78kg級	1回戦	高沼 宣浩	4年	肩車	○	井上 国学院大
-78kg級	1回戦	赤澤 穂	3年	肩車	○	大石 高千穂大
-78kg級	1回戦	菊池 和博	2年	不戦勝		飯田 明星大
-81kg級	1回戦	船越 健	3年	合せ技	○	宇津 東海大
-81kg級	1回戦	高野 剛	3年	合せ技	○	真嶋 成蹊大
-81kg級	2回戦	高野 剛	3年	不明	○	井手 大東文化大
-90kg級	1回戦	助川 忠臣	4年	合せ技		千早 東京大
-90kg級	2回戦	助川 忠臣	4年	小外掛		坂本 拓殖大
-90kg級	3回戦	助川 忠臣	4年	大外刈り	○	樋原 東海大 ベスト16
-90kg級	1回戦	酒井 敬史	3年	総合負		中子 創価大
-100kg級	1回戦	笹野 誠一	4年	裏投		笠原 帝京大
-100kg級	2回戦	笹野 誠一	4年	大外刈り	○	近野 国士館大

## ■第18回 東京学生柔道体重別選手権大会（女子） 平成11年9月5日 日本武道館

-48kg級 1回戦 高野 舞 1年 双手刈 ○ 高 橋 帝京大  
-57kg級 1回戦 村吉花奈子 3年 背負投げ ○ 粟 田 桜美林大

## ■第51回 早慶対抗柔道戦 平成11年10月17日 早稲田大学柔道場

本 墓			○	早稲田大学	6人残し
飯島 健介	1年	払腰	○	新井和範	優秀選手：助川忠臣、高野剛、西森千景
吉井 聰	2年	払腰	○	新井和範	
菊池 和博	2年	払腰	○	新井和範	
鈴木 龍海	2年	裏投	○	新井和範	
柴垣 克樹	1年	払腰	○	新井和範	
高野 剛	3年	○ 横四方固め		新井和範	
高野 剛	3年	○ 背負投げ		川角幸士	
高野 剛	3年	合せ技	○	橋本真澄	
赤澤 穂	3年	上四方固め	○	橋本真澄	
西森 千景	3年	足払い		橋本真澄	
西森 千景	3年	引分け		廣元大智	
船越 健	3年	合せ技	○	吉田昌史	
大滝 誠	4年	支釣込み足	○	吉田昌史	
高沼 宣浩	4年	引分け		吉田昌史	
笹野 誠一	4年	大腰	○	八木章裕	
酒井 敬史	3年	横四方固め	○	八木章裕	
助川 忠臣	4年	○ 支釣込み足		八木章裕	
助川 忠臣	4年	小外掛		林健太郎	
助川 忠臣	4年	引分け		小暮勇	
				塩谷耕吾	
				廣田金次郎	
				金辻真人	
				西田清二	
				西宮秀彦	
				吉田真也	

## ■第51回 早慶対抗柔道戦（女子） 平成11年10月17日 早稲田大学柔道場

本 墓	0	-	2	早稲田大学	点取り試合
村吉花奈子	3年	内股	○	国 澤	
衛藤希世子	2年	横四方固め	○	村 上	

## ■第41回 東京学生柔道二部優勝大会 平成11年10月31日 国士館大学柔道場

1回戦	シ ー ド				
2回戦	本 墓	1	-	6	青山学院大学
高沼 宣浩	4年	一本背負い	○	桜 田	
西森 千景	3年	大外刈り	○	大 山	
高野 剛	3年	小外刈り	○	山 口	
赤澤 穂	3年	大外返し	○	栗 栖	
酒井 敬史	3年	横四方固め	○	神 代	
笹野 誠一	4年	払腰	○	高 野	
助川 忠臣	4年	合せ技		加 納	

# 第1回慶應杯観戦記

平成7年卒 秋山 康元

平成11年5月29日（土）、第1回慶應杯（KEIO'S CUP）争奪柔道大会が三田綱町柔道場にて行われました。

この大会は塾柔道部の部員が減少傾向にある中、慶應義塾大学への進学者数が多い高校を中心として将来的に慶應大学に進学、体育会柔道部に入部する高校生のネットワーク作りを目的とした柔道大会です。当日は8校百数十名の高校生が集い、文武両道のもと柔道を志している高校生の出会いの場としても意義のある大変活気に満ちた大会となりました。

大会開始前には塾柔道部員による三田キャンパス見学会も行われ、高校生に慶應大学を実際に見て感じてもらうという趣向もそえられていました。

渡邊明治柔友会会长から開会のご挨拶をいただき、いよいよ試合開始となりました。試合時間は3分。国際試合審判規定。1チーム3名、1校2チームまでの合計15チームによるトーナメント方式により競われました。

各校とも実力伯仲し、熱戦につぐ熱戦が繰り広げられました。世田谷学園Bが1回戦で破れる波乱もあり、大将まで勝負がつかず代表戦もあり、といった具合に激戦を勝ち抜いたベスト4は世田谷学園A、開催校の意地で慶應A・B、海城A。

まず準決勝1試合目に世田谷学園Aと慶應Aが対戦。慶應は先鋒土井が取られ、中堅橋本・大将二宮が惜しくも取り返せず0-1で惜敗。

次に準決勝2試合目に慶應Bと海城Aが対戦。海城も奮闘するも、慶應先鋒吉田・大将前田がきっちり勝って2-0で快勝。

15チームの頂点をかけた決勝は世田谷Aと慶應Bの対戦。慶應はAチームの仇を討つべく全力を尽くしましたが、世田谷先鋒榎本・中堅滝口に吉田・中山と立て続けに取られ、最後大将前田が一矢報いるも1-2でまたも惜敗、地力にまさる世田谷学園Aの優勝となりました。（他の試合結果は後述）

試合後、全員による乱取稽古が行われました。応援にまわっていた各校の女子部員も柔道着に着替え稽古に加わりました。総勢百数十名により、試合で敗れた相手に再度勝負を挑む者、いい機会とばかりに強豪校の胸を借りに行く者といった具合に道場中所狭しと白熱した稽古が繰り広げられました。

稽古後、森部長先生により上位4チームそして優秀選手11名に賞状・メダル等を授与されました。

その後、森部長先生の挨拶、水谷柔友会名誉会長の乾杯のもと懇親会がとり行われました。試合・稽古の後の空腹を満たしつつ、先輩方や大学生も交え先ほどの稽古までとはうって変わって和気あいあいの雰囲気となりました。途中、水谷先輩から福沢諭吉先生の頃の慶應柔道部創設にまつわる話、小さい体ながらも柔道を全うしてきたご自分の経験談など貴重なお話をいただきました。また急遽、各校主将による柔道部紹介も行われ充実した内容となりました。最後に大会実行委員長の渡邊弘二先輩よりご挨拶いただき中締めとなりました。

当日参加した高校生全員に慶應大学のガイドブックと記念品がわたされました。

各校とも強豪校の名に萎縮することもなく、実力を出しきろうという生徒の熱気がとても印象的でした。そして非常に鍛えられている生徒も多く、大学でさらに鍛えれば大きく開花するであろう実感も持てました。

渡邊弘二先輩のご挨拶にもありましたが、以前から構想があり数年前は実現できなかった慶應杯を今般実行するにあたり、準備・運営に奔走された先生・先輩の皆様に紙面をお借りして心からお礼を申し上げます。

慶應杯を恒常化すべく、第2回目以降微力ながらもお手伝いできればと思います。

## ◎試合結果

### 〈第1回戦〉

第1試合	芝学園A	1-2	國學院久我山B
第2試合	巣鴨A	2-1	暁星B
第3試合	海城B	1-2	慶應A
第4試合	世田谷学園B	1-2	國學院久我山A
第5試合	慶應B	2-0	暁星A
第6試合	桐蔭	3-0	巣鴨B
第7試合	芝学園B	0-3	海城A

### 〈第2回戦〉

第1試合	世田谷学園A	3-0	國學院久我山B
第2試合	巣鴨A	1-2	慶應A
第3試合	國學院久我山A	0-2	慶應B
第4試合	桐蔭	1-2	海城A

### 〈準決勝〉

第1試合	世田谷学園A	1-0	慶應A
第2試合	慶應B	2-0	海城A

### 〈決勝〉

世田谷学園A	2-1	慶應B
--------	-----	-----

優勝 世田谷学園高校A

準優勝 慶應義塾高校B

第3位 慶應義塾高校A

第4位 海城高校A

柔友会報75号より

# 成毛秀臣先輩 華甲皆勤賞に寄せて 昭和42年卒 堀 信孝

華甲皆勤賞おめでとうございます。

61年間皆勤というのは、今年が2000年だから1939年以来ということになる。昭和でいうと14年だ。

氏は現在74才であられるから当時13才普通部の1年生の頃からだ。太平洋戦争を挟んで、戦中戦後の混乱の時期にスタートされたことになる。

確か戦後まもなくGHQによる武道追放令があり柔道部も解散させられたはずだと慶應柔道部100年史をひもといいてみたら、昭和25年の稿に成毛秀臣さん自らの筆で「昭和23年、ここ2、3年夕方に行って寒稽古を交通事情の緩和から朝7時より豊沢の飯塚先生の至剛館道場で行った。」との記述があった。

これ以前に、文部省体育局長の名で、昭和20年12月に発体「100号」学校付属の施設での柔道の禁止令が発令され、25年10月に解除されるまで続いたのだが、その間も寒稽古は続けられていたのが解る。「昭和24年は1月10日から1月23日まで寒稽古を行う。精勤者成毛韶夫、熊切昭男、萩原正夫、以上毎日12、3人が参加しました。」とあった。

そういう歴史を背負いながらの快挙だから、これはまさに奇跡に近い。

かくいう私も中等部の3年の時、昭和35年から、大学4年、昭和42年まで毎年寒稽古に皆勤したからその当時も寒稽古で、成毛さんの道衣姿を見ている。氏と私は20才近くの年齢差があるから、このころは氏が脂ののりきっていた頃で、体力差実力差はいかんともしがたく、全くと言っていいほど歯がたたなかつた。

当時寒稽古の最中、道場は人であふれかえっていたが、成毛さんが我々中学生や高校生の所へ現れようものなら、目をそらし、なんとか稽古相手に選択されないよう祈るような気持ちで近くに来ないでくれと横目でウォッチングしていたのを思い出す。私が中学、高校の頃は立ち締めと言って柔道着の両襟をつかんで、まっすぐ上に持ち上げ、宙ぶらりん状態で締めて落とすのが氏の得意とするところで、運悪く稽古相手に選ばれてしまったら、させたいようにさせて、締められてすっと落ちるのがコツで、じたばたしようものなら執拗にやられ、悔し涙で多くのものが大声で泣いた。すると、「泣いた、泣いた」と氏のはしゃぐ声が聞こえ、何故この先輩の傍若無人さを皆注意しないのだろうと思っていたが、まあこれは毎年繰り返される寒稽古の恒例行事で、周りのものは慣れっこになっていた。ただ誤解の無いように言っておくと、これは強い子を育てようという氏の独特の愛情表現で、今で言うところのイジメとは全く関係ない。さすがに立ち締めは初心者で高1くらいまで、柔道が強くなれば簡単には締められないが、今度は綱町道場の板堀に大外巻き込みで投げられぶつけられるというわけで、本能的にこの人とは稽古しない方が無難と、近くに来そうになると相手を捜してすぐ稽古に入るという回避行動にでる訳で、稽古を促す効果があったというわけです。

しかし、毎年新しい人が中等部にも高校にも入っていたから成毛さんの犠牲者選びに苦勞は無かった。

私が高校の頃は、成毛さんは、慶應義塾大学の1、2年生を対象にした一般教養課程の選択科目「柔道」の講師として、大学生に日吉で柔道を教えられていた時期だった。当時既に高校生もその同じ日吉の記念館の中の道場を使っていたから、成毛さんも高校の稽古にちよくちよく参加され指導された。午後の稽古の時間に、1週間に1回、氏の車がその前に駐車してあると「あっ、成毛が来ている」とすっと記念館前からUターンして帰ってしまう高校部生が多かったのを氏は知る由もない。

今年の寒稽古でも氏の行くところ幼稚舎生が潮が引くごとく一斉に散ってしまい相変わらず恐い存在らしかったが「あっ、なるけが来た」と大声で呼び捨てにして叫ぶものがあったから、どうやら最近は好々爺の部類にはいって来ているのかもしれない。

鳥居塾長がわざわざお見えになり、成毛先輩の華甲皆勤賞に対してお言葉を用意されていたようでこうおっしゃった。

「明治10年福沢先生が三田の山に柔道部を開かれてから現在まで123年です。その内の61年の寒稽古を皆勤されていることは1人で塾の長い柔道部の歴史の半分を知っていることになる。柔道部の歴史そのものだともいえます。」とおっしゃった。

成毛さんはまさに柔道部の歴史そのもので、学生時代も大柄な体躯で普通部の頃から無類の強さを發揮していたのは部史に載っている記録を見ても解る。

昭和17年の記録で普通部と栃木商業との勝ち抜き戦での試合で副将で出た成毛さんが、それまでの7人の劣勢を挽回し大将を含む8人を一本勝ちで取り、勝利した記録がある。興味深いのはその内の3人を送襟締ではふっている点で、締めは得意技であったことが知れる。抜きんでた実力があったのだ。

部史に26年頃より寒稽古の記録が登場するが、そこには毎年必ず成毛秀臣の名が記載されている。

誰がなんと言おうと戦後の学生時代柔道部にいた人は成毛さんの顔を拝み、あの痛い足払いや大きな体を有効に利用した大外巻き込みを知っていることだろう。寒稽古には成毛さんが必ず来ているという安心感は、連綿と続く慶應義塾体育会柔道部の伝統を影で大きく支える原動力になっている。

また、成毛さんは港区の柔道連盟会長として後輩の昇段に道を開かれた。講道館の昇段手続きや申し込みに便宜を図り、多くの塾生の昇段を助けられた。

そう言った面でも卒業してから、お世話になった人は多いはずだ。

よく継続は力なりとはいはけれど61年はその言葉をも超越している。

就職し仕事を持ち、結婚し家庭を築き、子を持ち父親としての役目を背負うと言うことになれば、人生には紆余曲折があり、初心を貫徹することには幾多の困難があったことだろう。たぶん寒稽古に皆勤すると言うことにプライオリティをつけ、スケジュール調整をし、健康管理にも気遣って、達成できた偉業であろう。

最近でこそ10日間の寒稽古ではあるが、我々の頃はずっと15日間であった。三田綱町の道場はとても寒かった。始動して30分以上稽古をしないと冷え切った足にぬくもりが伝わることはなかった。体力的にもきついと思われたことは1度や2度では無かったはずだ。

稽古が終わると、我先にといつても先輩後輩の順序は厳然としてあったが、大きな木の風呂にまるで芋の子を洗うがごとく大勢で入って暖をとった。ここで先輩の話を聞いたりするのが楽しみでもあった。まさに裸のつきあいで、中学生や高校生の目からは先輩はとても大きく見えた。

だから私は成毛さんがふんどしを愛好されているのも知っている。

中学生には大学生が大人に見え、大学生には社会人がずっと大人に見え、「早く自分も大人になりたいな」と思いそういう良い刺激を受けた。

今も幼稚舎生から中等部、普通部、高校、大学、先輩が一同に会して稽古する伝統行事が続いていることは、これは柔道部に入っていればこそで、昔、我々が感じた思いを得る機会が今の人にも与えられていると考えるうれしい。

忙しい世の中だからと言うべきか？世の中にゆとりが無くなっているからか？或いはガッツの問題なのか？成毛さんの偉業に近づく人は今のところ無い。ならば氏の記録のどんどん延びることを期待する。

そして柔道部の歴史の続く限り、次なるチャレンジャーが現れて、何時の日かこの偉大な記録が破られる日が来るまで、柔道部の歴史が続くことを祈りたい。

サンケイ新聞対馬好一君がこの21日の夕刊に成毛先輩や柔友会の事を書いています。

柔友会報76号より

